

めざす児童生徒像

〈学校教育目標〉	自らつながり学ぶ子の育成
〈目指す児童像〉	あたたかい子・・・相手を理解し相手の立場を思いやれる子 たくましい子・・・心身ともに健やかで、チャレンジできる子 かしこい子・・・知識を活用し、自ら学びに向かう子

★数値の下 上段 A(%)下段 B(%)				※児童生徒結果－教員結果(上)・保護者結果(下)						
	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		★数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策
					教員	児童生徒	保護者			
(学校で設定)	自己肯定感の向上	・①・②の児童アンケートの肯定的回答を100%にする	①	学校生活を楽しんでいる。	100 A:47.6 B:52.4	91.1 A:56.5 B:34.6	94.6 A:48.6 B:46.0	－8.9 －3.5	・①は－8.9%，②は－4.5%であった。 ・①，②ともに，90%を超える高い数値であった。しかし，目標指数には届かず，Aと回答した割合が低かった。 ・同時期に教職員に調査した①について指導しているは100%，②について指導しているは95.2%であった。教職員の意識の高さが高い数値の一因であると考ええる。	・①，②とも，否定的回答をした児童を担当が把握し，一人ひとりの様子を観察しながら，個別の指導，声かけを行う。 ・現状を踏まえ，各部がこれまで以上に連携して各種の取組を行っていることで，授業で「わかった，できた」を実感したり，友達とよりよい関係を築いたりするなど，児童の学校生活を充実させていくことで，Aの回答の向上を図る。
			②	よりよいつながりのために，自らあったか言葉を使ったりあったか行動をしたりしている。	95.2 A:19.0 B:66.7	91.5 A:35.7 B:55.8	86.5 A:18.9 B:67.6	－3.7 +5.0		
			集計							
	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目						達成状況の分析	改善策
業務の働き方や改善		・①・②ともに肯定的回答を90%以上にする	①	学校組織の中での自分の役割を果たすために，組織的に（相談・共有し）取り組んでいる。	100 A:66.7 B:33.3				・①については目標指数に到達，②については目標指数に4.3%届かなかった。 ・②については，4～6月に80時間越えが一定数いた。学級開きや生徒指導対応，計画訪問など，学級や学校としての業務が集中していたことも一因であると考ええる。	・②については，個人として毎日，毎週，毎月の勤務時間の実態を意識するように全体及び個別に関わる。時間外勤務が多い教職員には助言や支援を行ったりする。 ・学校全体としては，毎日の児童の下校時刻を5分早める日課へと変更して，放課後の時間を増やす。
			②	80時間越えゼロに向け，時間外勤務時間が減るよう心掛けて行動している。	85.7 A:57.1 B:28.6					

	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
小松市共通重点項目	指導力の向上	・①・②ともに肯定的回答を90%にする	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、具体的な取組を共通実践している。	95.2 A:47.6 B:47.6				①・②ともに肯定的回答が90%以上で高い水準である。 ①では、共通実践を明確にして研究を進めていく必要がある。	・研究主題である「自律した学び手」の姿を多面的、多角的に捉え、教員が目指していく児童の姿を明確にし、共有のうえ、共通実践を進めていく。
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100 A:71.4 B:28.6					
			集計						
		・研究主題である「自律した学び手の育成」のために、①の肯定的回答を90%以上にする ・④の肯定的回答を中間85%以上、年度末90%以上にする	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	85.7 A:28.6 B:57.1	87.2 A:48.9 B:38.3		1.5	①の項目では、目標指数90%には到達していなかった。	①単元構想シートに「自律した学び手」となるための教師が授業で行う手立てを記載する。単元の中で児童自身が自己選択したり、学ぶ相手や場を選んだりする活動を位置づけ、実践する。
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気づいたりすることができている。	95.2 A:23.8 B:71.4	89.4 A:48.5 B:40.9		-5.8	③の項目では、児童の肯定的意見は86%と高い数値であった。学年別に見てみると高学年に上がるほど肯定的な回答が低くなっていることが分かった。	②・③児童が協働的に学びを深めるために、「つなぐ言葉」の指導を行う。6年生が実際に話し合いをしているモデルとなる姿を動画で共有し、活用できるようにする。
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	90.5 A:23.8 B:66.7	86.0 A:44.3 B:41.7		-4.5	④の項目では、教員と児童との肯定的な回答の差が12.3%と大きい。教員と児童の「できた」の捉えにズレがあることがわかる。	④授業での児童の振り返りの際に「わからなかったこと」「難しかったこと」「次に生かしたいこと」など自己調整につながる視点を明確にし、児童の実態を正しく見取る。その見取りを生かし、授業展開を工夫する。
			④ 児童生徒は、学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。	100 A:33.3 B:66.7	87.7 A:49.4 B:38.3		-12.3	⑤の項目では、児童の肯定的回答が80%と低く見えるが、低学年(特に1年生)はまだタブレットを活用できる発達段階でないため、低い結果となった。中学年は92.6%、高学年は86.9と高い結果であった。	⑤授業の中で、「他者参照」し、主体的、協働的に学びを深めていけるための活用方法を、教員GIGAミニ研修を行い、スキルを高めていく。
			⑤ 児童生徒は、学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用し、友達と考えを共有したり比べたりすることができている。	85.7 A:23.8 B:61.9	80.0 A:52.8 B:27.2		-5.7		
			集計						
	学力の向上	・②教員の肯定的回答を85%以上にする ・③教員の肯定的回答を中間90%以上、年度末95%以上にする	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	95.2 A:61.9 B:33.3				①②③肯定的回答の割合が目標を達成することができた。年度初めに全職員で共通理解を図るとともに、校務分掌部会や学年会等で「学校力向上ロードマップ」や「カリキュラムマップ」の定期的チェックを行った成果である。	①教科横断的な学びを定着させるため、「カリキュラムマップ」を定期的に見直し、関連する単元や行事のつながりを学年会等で共有しながら計画的に授業を推進する。
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	100 A:52.4 B:47.6				①②会議の削減や精選などの業務改善を推進したことで、PDCAサイクルを回すための協議時間を確保できた成果だと考えられる。	②PDCAサイクルをより実感・定着させるため、「評価・改善（C・A）」の機会を定期的に設定する。学年会で、月1回カリキュラムの成果と課題を協議・共有し、次の学期や次年度への具体的な見直しにつなげる。
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100 A:47.6 B:52.4				③自学ノートの進め方について児童・職員間で共有を図ったことや、学力調査分析会で協議したことにより、全校で足並みをそろえた共通実践を推進することができた。	③算数科における評価テストの分析会や「重点単元シート」を活用し、課題として洗い出された具体的な取り組みを2学期以降の授業で実践する。その効果を2学期末に検証・振り返りをし、次なる学力向上策へとつなげる。
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	76.2 A:42.9 B:33.3				④肯定的回答は76.2%にとどまった。小中連携主任会で話し合われた内容や情報を、教職員全体へタイムリーに共有・伝達する場を確保できなかったことが主な要因として挙げられる。	④夏休み中に実施される「小中連携全体会」を活用して情報共有や伝達の機会を設定し、全職員で小・中連携の課題や進捗等を共有する体制を整える。
			集計						
		・①と②ともに児童の肯定的回答の割合を80%以上にする	① 児童生徒は、分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている。	90.5 A:33.3 B:57.2	86.2 A:50.9 B:35.3		-4.3	①「自分で学び方を考えて工夫する」の児童の肯定的回答は86.2%と目標値は達成したものの、教員の肯定的回答との間に差が見られる。教師側が想定する学び方と児童の認識にズレがあり、児童自身が「学び方」の手立てを十分に理解・実感できていない現状がある。	①各クラスにおける効果的な実践例やアイデアを共有する機会を8月末に設定する。共有された実践例を日々の授業や学習の中で実践・体験を積み重ねさせることで、学び方を身に付けさせていく。11月には実践の成果や課題について検証・振り返りを行う場を設ける。そこで得られた成果や課題を、3学期以降の指導改善等に活かしていく。
			② 児童生徒は、学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用し、自分のペースで理解しながら学習を進めることができている。	95.2 A:42.8 B:52.4	92.8 A:64.1 B:28.7		-2.4	②児童の肯定的回答は92.8%となり、目標を大きく達成できた。特に1年生における使い始めの時期の計画的な指導や、各学年の日常的な授業での積極的な活用が成果として考えられる。	②GIGA校内研修会等を活用して各学年の効果的な実践例を共有・紹介し、「実践→検証・改善」のサイクルを回すことで、ICTを効果的に活用した授業を構想し、学びの質を高めていく。
			集計						